

Prototype

Prototype (Sicher, 132-133) (2023年6月15日栗飯原さんのテキスト訳から)

プロトタイプとは、人が自分自身を形成しようとする姿や概念のことです。それは、その人の前にある何かであり、その人が価値があると考える何かです。もし誰かがナポレオンのようになりたいとしたら、そのときナポレオンは彼もしくは彼女のプロトタイプであり、モデルなのです。

Sicher, p.132

『個人心理学講義 The Science of Living』より

これらの精神的な態度の機能は、それらが築きあげられてきた方法と同様、普通の大人の場合に見るよりも、子どもたちや精神病患者の場合に、よりよく見ることができます。既に見たように、ライフスタイルも、原型の段階の方が、後のライフスタイルよりも、ずっとはっきりしていて、単純です。実際、原型の機能は、それが触れるあらゆるもの、即ち、肥料、水、食物、空気を同化するまだ熟していない果実にたとえることができます。これらのものは皆発達段階で取り入れられます。原型とライフスタイルの違いは、熟していない果実と熟した果実の違いのようなものです。人間の場合も、熟していない果実の段階の方が、切り開き吟味するのが容易です。しかし、それが明らかにすることは、熟した果実の段階にも、ほとんど匹敵します。

岸見一郎訳『個人心理学講義』 p.129, 1996.

これらの劣等性と優越性についてのあらゆる問題は、子どもが学校に行く前の家庭での生活に、その根源があります。子どもがライフスタイルを形成するのは、この時期です。この子どものライフスタイルを、私たちは、大人のライフスタイルと対比して、原型と名づけました。この原型は、熟していない果実のようなものです。そして、熟していない果実のように、何かの障害、例えば、虫がつく、というようなことがあれば、発達すればするほど、虫もまた大きくなります。

同上 p.162

Segment

部分。(みかんの袋など、自然にできている) 区切り、区分、節。

1. Each of the parts into which something is or may be divided
2. <Geometry> a part of a figure cut off by a line or plane intersecting

Extracting Ideals From Reality (Sicher, p111-112) (2022年2月17日中井さんのテキスト訳から)

We live by extracting a part out of reality. What we see as reality a part of the course of evolution.

私たちは、現実のある部分を抜き出して生きています。私たちが現実として見ているものは、進化の過程の一部なのです。

From this assumption, we then concretize a place where we would like to be. All persons live by extracting a part out of reality, what they see as reality, what they perceive the future existence of the world to be. They then make this part of reality their own life realm.

この仮定から、私たちはこうありたいという場所を具体化するのです。すべての人は、現実から一部を抜き出して、自分が現実として見ているもの、世界の未来の存在を認識して生きています。そして現実の一部を自分の生活領域とするのです。

This ideal, perhaps extracted from their surroundings, impressions, and experiences, is built into a little world of their own. Adler said, "Everyone extracts from the whole his own little pigsty, in which he now hops around happily or unhappily."

この理想は、おそらく彼らの周囲の環境、印象、経験から抽出されたもので、彼ら自身の小さな世界を構築しています。アドラーは、"誰もが全体から自分だけの小さな豚小屋を抽出し、その中で今幸せにも不幸にも飛び回っている"と言いました。

「相手を理解する」ことについて

○アドラー

人間を理解するという事は、生易しい仕事ではない。個人心理学は、おそらく、学び実践するのが一番難しい心理学であろう。われわれは、常に全体を求めて耳を傾けねばならない。本当の鍵が自ずと明かになるまでは、懐疑的でなければならない。われわれは、無数の小さなこと——人が部屋に入ってくる来方、その人の挨拶や握手の仕方、その人の笑い方や歩き方——から、ヒントを集めなければならない。われわれは、ある一点では迷ってしまうかもしれない。しかし、他の多くの点が現れてきて、われわれに訂正を求めたり確証を与えてくれたりする。

高尾利数訳『人生の意味の心理学』pp.83, 1932.

治療者との共通理解に達するために、患者は自分のすべきことをしなければならない。ふたりで患者自身の考え方やその問題点について、協力して解明しなければならない。このとき、もし治療者が患者を理解したと思っても、患者自身が同じ理解に達していないのであれば、治療者が正しいという証拠はない。証拠のない真実は本当の真実ではない。治療者の理解はまだ不十分であるかもしれない。このように、ふたりで患者の誤りを見つけ出すために協力するのは、患者自身の利益のためと、患者以外の人々の幸福のためである。

IPAA, p.340. 補正項 2007年8月15日より

その人は、自分の人生のスタイルのなかで、自分の目標を、われわれがそれを一度限りで定式化するようなふうに表現はしない。彼は、それを漠然と表現するので、われわれは、それを、彼が与える示唆から推測しなければならないが、彼の意味するものは、彼が用いる言葉以上のものである。彼のいわんとすることの大部分は、推察されねばならぬ。つまり、われわれは、行間を読まねばならないのである。同じ事は、個々人の人生のスタイルという、あのいとも深遠な、もっともこみ入った造化の妙にもいえる。心理学者は、行間を読むことを学ばねばならぬ。彼は、人生の意味を味わうという技術（アート）を学ばねばならないのだ。

高尾利数訳『人生の意味の心理学』p.65-66.

○補正項

（前略）構造主義に出会った。その結果、人間が他者を理解できるのは、言語の構造に鍵があるのだということがわかって、問題は半分くらい解決した。つまり、言葉が通じ合うということは、共通の心を持っているという証拠だということだ。（中略）

しかし、ポスト構造主義（ポストモダン）の人々によって、単語の意味や文章の意味が一義的でないということがあきらかにされて、やはり人と人が理解しあうことは無理なのだといわれるようになった。（中略）しかし、私がKさんのことをどう思っているか、団子についてどういう思い出があるのか、人からものをもらうことをどう感じるのか、食べるということが私にとってどういうことなのか、というような、きわめて私的なことが、構造主義ではすべて切り捨てられている。

補正項 2006年10月22日「日本アドラー心理学会3日目」

心理療法に引きつけていうと、こういうことじゃないかと思う。相手を理解できると思わないこと、相手に理解してもらえないと思わないこと、解釈を通じて私を相手に押しつけ

ないこと。相手が真にひとりの個性的な人間であるように私にできることを考えること、社会によって個性を奪われ無名化され道具化され疎外されている相手を話を聴くことを通じて蘇生させること。しかも、相手は一貫して《謎》であり続けること。

もうちょっと現場に即して言うと、《話を聴く》ということが、「私が相手を理解する」から「相手が相手を理解する」に転換したのだというよと思う。話を聴かれることでもって、「Kさん」とか「団子」とか「食べる」とか「XからYをもらってZする」という文とか、そういうことが、聴かれる人の中で《新聞的》叙述から《詩的》叙述に変わって、ひとつひとつの単語、ひとつひとつの文章が、うるおいを持ち光を放つようになる。これはちょっとすごいことだ。

補正項 2006年10月23日「世界の再魔法化」

(前略) 意味は文脈の中にある。ある言葉が発せられた文脈を考えると、結局のところ言葉の意味は完全にはわからないことになる。言葉は辞書的に意味を定義することができないのだ。ただ用例から知っていくしかしょうがない。微分的ではなくて積分的なのだ。しかも、用例、すなわち言葉の背後の文脈になっている相手の人生は知ることができない。だから、対話とは謎に向かい合うことであり、言葉とは象徴なのだ。その意味がただちに読み解けるということは、まずありえない。おそらく一生つきあっても読み解けないかもしれない。レヴィナスが言うように、他者とは謎なのだ。

じゃあ、なんのために話しあうのかという、カウンセラーがクライアントを知るためではなくて、クライアントが自分自身を知るために話しあう。自分自身を「知る」といっても、それは「ほんとうの自分を発見する」という意味ではなくて、「新しい自分を発明する」という意味なのだが、それについてはまたいつか。

補正項 2006年10月24日「伸びない人々」

(前略)「クライアントの内面を理解する」ことを目的とせず、「クライアントに語ってもらう」ことに焦点がある。他者を理解することはできない。しかし、クライアント自身が自分の問題を「語りなおす」ことによって、出来事や自分自身についての新しい見方を手に入れ、それでもって問題を自力で解決するだろう。治療者はクライアントが、今までとは違った言葉で問題を語るように援助する。

(中略) 私はアドレリアンであると同時にエリクソニアンなので、意図しようと意図しなかりと、私のコミュニケーション行動(言葉やまなざしやボディランゲージ)のすべてが相手にとって操作的であることを知っている。それならいっそ、それを意識的に制御して、もっとも相手にとって有益であるように操作すればいい。(中略) 徹底的に私が操作していることを認める。

じゃ、催眠なのかという、そうでもない。というのは、私はなにかを教えようとはしていないからだ。クライアントが自分で答えを見つけられるように、語りなおしてもらっ

ているだけだ。この点が古典アドラー心理学ともっとも違う。古典アドラー心理学のカウンセリングは教育的カウンセリングであって、アドラー心理学の知識をクライアントに教えることを主な方法にしている。しかし、今日のは、アドラー心理学の「ア」の字も出てこない治療だった。

補正項 2006年12月16日「玄人受け」

人が他者を理解するというのは、「相手が言葉に込めたイメージをわかる」ということではなくて、「相手と同じように言葉が使えるようになる」ということなのだ。それ以外に、人が他者を理解する方法はない。つまり、言葉が何を指し示しているかがわからなくてもいいので、ただ、話がきっちりと通じあって矛盾がおこらなければそれでいいのだ。

補正項 2007年3月30日「他者を理解する」

論文「語り直しとしての心理療法」 2007年6月

ICASSI チューリッヒ・シート

論文「ライフスタイル分析の新しい方法」 2007年10月

○アドラーの分析例

ある家族の次男が問題児であった。われわれが観察しえたかぎりでは、彼は全く健康で遺伝障害など何もなかった。長男は両親のお気に入り、次男はいつも、レースに出ていて先を走る者を負かそうとしているかのように万事において兄に迫り着こうとしていた。彼の社会的関心は発達させられなかった—彼は母親に非常に頼っていて、母親から得られるものすべてを手に入れたがっていた。彼は、兄と張り合おうとして苦勞していた。彼の兄は学校でクラスの主席であり、彼自身は最低であった。彼の支配欲、専制欲はきわめて明瞭に見られた。彼は家で歳とった女中に命令し、部屋の中を行進させ、兵隊のように訓練したものであった。その女中は彼を好きで、彼が20歳になっても彼に将軍にならせて遊ばせた。彼は常に、自分がしなければならないことについて心配し、過大な印象を受けすぎていた。そして同時に、彼は決して何もやり遂げたことはなかった。彼は、困ったときにはいつでも、自分の行為のゆえに非難され批判されはしたが、母親から金をもらうことができた。彼は、突然に結婚し、自分のあらゆる困難を増大させた。しかしながら、彼がやりたかったことは、兄よりも先に結婚したということであり、彼はこのことを偉大な勝利だと思って居た。このことは、彼の自己評価が本当は非常に低いものであったことの証明である—彼は、そのような馬鹿気たことにおいて勝利者であろうと欲したのである。彼は、結婚に対する準備など全くできていなかった。そして、彼と彼の妻とはいつも

喧嘩をしていた。母親が以前ほどには彼を助けることができなくなったときに、彼は、何台ものピアノを注文し、支払いもしないでそれらを売り払ってしまった。このために彼は投獄された。この個人史のなかで、われわれは、後の経歴の根源（ルーツ）を幼児期のうちに見ることができる。彼は、大きな樹の陰にある小さな樹のように、兄の日陰のなかで育った。彼は、性質のよい兄と比べて、自分が軽視され無視されているとの印象を持ってしまったのである。

- ① どのようにしてこれらのアイデアが発達したのか
- ② どんな原型に沿って自分を形成したのか
- ③ どんな小さな部分で生きようとしているのか
- ④ 何を知覚しているか

もうひとつの例は、12歳の少女の場合であるが、彼女は非常に野心的であり、両親によって甘やかされていた。彼女にはひとりの妹がいたが、彼女はその妹をととても嫉妬しており、彼女の敵対意識は家でも学校でも顕著であった。彼女は常に、妹のほうが大事にされ、余計にキャンディーやお金をもらっているという例を見つけ出そうとしていた。ある日のこと、彼女は、級友のポケットからお金を盗み、それが見つかって罰された。幸いなことに、私は彼女に、その状況全体を説明することができ、彼女が妹にたちうちできないのだという意見から彼女を解放してやることができた。同時に、私は彼女の家族にその状況を説明してあげ、彼ら二人の張合いをやめさせ、妹のほうが好まれているという印象を与えることを避けるように工夫した。これは20年も前に起こったことである。この少女は今では非常に正直な女性になっており、結婚して自分の子供もあり、あの時以来、彼女の人生において大きな過ちを犯したことはない。

高尾利数訳『人生の意味の心理学』pp.258-260 より